

手で本をつくること

macobook works(マコブック ワークス)

孝本 真由子

本屋さんに行くと、きれいに製本された本が当たり前のように並んでいる。それらは機械でつくられたものだ。しかし、手仕事でつくられている本もある。私はこの、手で本をつくる製本の仕事をしている。どんな内容かという、壊れた本の修理をしたり、オーダーメイドで本をつくったり、ときには本づくりを教えるワークショップなども開催している。

以前は出版社で映像出版物の企画制作の仕事をしていた。とてもおもしろい仕事であったが、当然、たくさん売ることを常に求められ、いつも“数字”を追いかけていたように思う。製本の仕事を始めたことで、一冊の本が持ち主の人生に寄り添い、気づきや励ましを与えるということを実感した。

工業製品や情報端末の溢れる現代において、「手で本をつくることに何ができるのか」と思いながら、本と人に向き合っている。そのヒントを本の持ち主やワークショップの参加者の方から学ぶことも多い。ここでは、その中から2つのエピソードを紹介する。

■ 日常生活に役立つ本づくり「これでサッカーができるぞ！」

和綴りからノートまで、さまざまな本づくりワークショップを行っている。なかでも、この夏に人気だったのは、木でできた珍しい本の「木簡づくり」。日本では、奈良時代を中心に一枚の木の板に墨で文字が書かれ、メモや荷札などのさまざまな用途で使われていたが、元をたどると古代中国で発明されたものである。竹や木の短冊を紐で綴じ連ねて、そこにテキストを記して本として使っていた。巻き寿司をつくるときに使う“簀巻き”のような形状である。

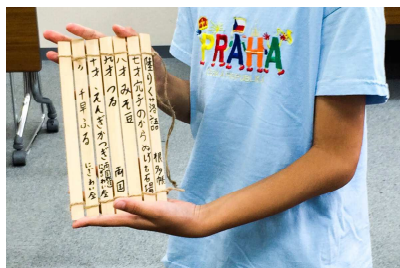


写真1 子どもがつくった木簡

簡単に本格的な本をつくることのできることで、子ども向け講座にも適している。実際、小中学校の教員向けの研修の中で紹介したことがきっかけとなり、この木簡づくり企画が始まった。

8月に東京都江東区で開催した子ども木簡づくりでは、7枚の板をつないでオリジナル木簡をつくった。小学校低学年の参加者たちは、“紐を結ぶ”という初めての作業に苦戦しつつも無事に完成。そのうちの一人のお父さんが、“結ぶ”デビューを果たした息子に向かって「これでサッカーができるぞ！」と喜んでいた姿が忘れられない。一人で靴紐も結べるようになるだろう、ということらしい。まさか本づくり体験がサッカーに役立つとは、思いも寄らなかった。

改めて本づくりに必要な作業を分解してみると、実に多くの日常生活にかかわる要

素が含まれている。結ぶ、切る、折る、貼る、測る、数える、穴をあける、書く……という行為。はさみ、定規、針、筆、紐……といった道具の使い方。さらには、記録する、伝える、順番を考える、表現する……といった思考方法。これらを本づくりを通じて学ぶことができる。ちなみに、この木簡づくりの場合は、数える、綴じる、結ぶ、切る、筆で書く、表現する、伝えるなどの要素が含まれている。自分の手で本をつくった体験が本以外のことにも活かすことがあれば、こんなに嬉しいことはない。

■ 朽ちてゆくものを直すこと「思い出までも鮮やかに蘇るようだわ」

機械製本で新しい本を大量につくることはできても、一冊の壊れた本を直すことは難しい。本の壊れ方は千差万別で、今後の使用方法や一冊一冊の個性に合わせて直す必要があるからだ。この“直す”ことの魅力にはじめて心惹かれたのは、器を修理する金継ぎという技法だった。割れたり欠けたりしてしまった器を、漆と金属粉を使って直す、日本独自の技術である。器としての機能を回復させるだけでなく、割れた箇所すら美しく魅せる術があるということに、十代の私は非常に感銘を受けた。製本の仕事を始めたきっかけも本の修理だった。「高校時代に使っていた楽譜を修理して再び練習に使いたい」というピアノ教師の方からの依頼。中を開くと、当時の書き込みがたくさん残されていた。

修理の依頼には、その本と持ち主との間に歴史があり、直したい理由もさまざまである。戦前のアルバムの修理を行ったときのこと。埃や汚れを取り除き、剥がれかかった写真を貼り直し、表紙の土台を交換して全ページを綴じ直した。持ち主はきれいになって返ってきたアルバムを開いて「思い出までも鮮やかに蘇るようだわ」と言った。本を直すことで50年以上も前の記憶が鮮明になるということに、金継ぎを知ったとき以来の衝撃を受けた。



写真2 蘇ったアルバム

今は携帯電話やデジタルカメラで撮った写真を簡単にデータで保存できるので、私自身も写真をプリントすることは減った。画面の中にいつでも“鮮やかな思い出”を見ることができるからだ。ただし、そのデータが消えない限りは……。鮮やかさと引き換えに、一瞬で消滅する危うさを孕んでいる。デジタルデータも永遠ではない。あらゆるものはいずれ朽ちてゆくという自然の摂理は、やはり変わらないのだと思う。紙の本もやがては朽ちてゆくものだが、直すことでその時の流れを少しでも遅らせることができればと思う。

■ 最後に

現代は、紙の本から電子書籍、スマートフォンまで実に幅広い情報媒体が共存している。この変革の時代に本づくりができることは本当におもしろく、ラッキーだと思っている。手で本をつくることに何ができるのか。これからもその可能性に挑戦していきたい。